

## 特別企画 2016年春の叙勲受章記念インタビュー



2016年春の叙勲で佐賀大学名誉教授の三浦哲彦氏が瑞宝中綬章に輝いた。三浦氏は退官後、軟弱地盤研究所を設立し、地元技術者の育成と技術向上に努めてきた。これまでを振り返り「自分の専門分野に関するプロジェクトが県内で次々に動き、最高に恵まれていた」という三浦氏に話を聞いた。

## 2016年春の叙勲「瑞宝中綬章」

### 佐賀大学名誉教授 三浦哲彦氏に聞く

#### ◎受賞の喜び

佐賀大学に赴任してすぐから、自分の専門分野に関わりのあるプロジェクトが今日まで続いたことは、とても幸せだった。研究ができ現場での実験にも関わることができ、それが今に至るまで続いている。自分が一人でした仕事ではなく、周りの方たちと一緒にした仕事。軟弱地盤の沈下という地元の問題を、地域の方の力を得て解決できたのが、受賞のベースではないかと思う。喜びというより、周りの方への感謝の気持ちの方が大きい。

#### ◎思い出に残る仕事

自分が一生懸命になれるテーマが次々に舞い込み、思い出はたくさんある。その中でも佐賀に来て最初に取り組んだ広域地盤沈下との出会いは大きい。佐賀県出身で

広域地盤沈下で苦しんでいるということを知らなかつた。環境庁の依頼で調査をはじめ、どれくらい地下水をくんだら、どれくらい沈下するか因果関係を調べた。

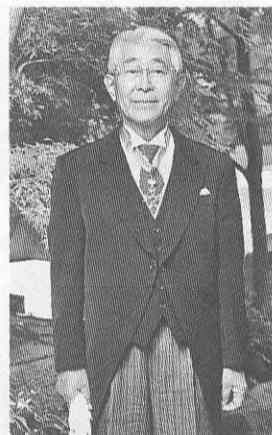
同時に佐賀空港建設計画の話が出て。海水の平均潮位よりも低いところに滑走路を造るという、これまでに前例がないことだつた。沈下する地盤の上に盛土をして舗装するため、沈下量の予測をデータをもとに検討した。すると佐賀の地盤と他の地域の地盤に、同じ高さの盛土荷重を乗せると他の地域より2倍以上沈下することが分かつた。それだけ地盤の圧縮性が高いということで、飛行機が乗つて大丈夫なのか?との意見もあつた。

しかし、検討していく中で地盤の水を抜くことで沈下を防ぐことができるということが証明された。軟弱地盤のもつとも基礎的な問題である沈下の予測を行い、粘土状の地盤の上に飛行場をつくるという取り組みは、非常に刺激的でとても楽しい経験だつた。

その数年前に六角川で大洪水が発生し、6㍍の河川堤防を7㍍にかさ上げするという動きがあつた。検討会に加わり10年余り議論してきたが、軟弱地盤上に立つ堤防を1㍍かさ上げするために、さらに上から土を盛ると滑つて壊れるということが分かつた。そこで、深層混合工法を施し、地盤を強くしてから盛土工事を行つとい

う。それが事業として認められ現在の「フローティング基礎研究会」がある。

# プロジェクトの原点は「低平地」



5月12日に東京で叙勲伝達式が行われた

うことを検討した。このプロジェクトでは、沈下とは違う地盤を強くするということに着目した。

興味を持ったのは、沈下によつて地盤が強くなる圧密という現象。いかに上手く効率的に圧密を

させて、壊れない堤防を造るのがポイントだったが、河川を切つて新しく堤防を造ると圧密の違う堤防ができる。現場で様々な工法で

が分かつた。

それが終わったじる、建設中の空港道路でコラムアプローチ工法、コラムスラブ工法の開発に携わった。道路新設の工事が終わつた。段差緩和のため、県

の検証を繰り返し、設計・施工上の注意点や工法ごとの耐久性などを

が分かつた。

それが終わつたじる、建設中の空港道路でコラムアプローチ工法、コラムスラブ工法の開発に携わった。道路新設の工事が終わつた。段差緩和のため、県

と共同で10種類の路盤工法を比較する現場試験を行つ機会を与えられた。沈下してから補修するので

が始まつた。段差緩和のため、県

が始めた。段差緩和のため、県

と共同で10種類の路盤工法を比較する現場試験を行つ機会を与えられた。沈下してから補修するので

が始まつた。段差緩和のため、県

と共同で10種類の路盤工法を比較する現場試験を行つ機会を与